

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 追悼文 中本先生との大神島調査

著者	名嘉真 三成
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	18-19
ページ	48-49
発行年	1995-02-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/12036">http://hdl.handle.net/10114/12036</a>

## 中本先生との大神島調査

名嘉真 三 成

1976年7月から8月にかけて、宮古大神島の方言調査に出かけた。わすが20軒たらずの島には旅館や民宿はなく、電気は自家発電で賄えるものの、水は天水と井戸水に頼るという簡素で静穏な雰囲気の小島である。四人は無理にお願いして一軒の家を借り、自炊生活をしながら調査に励んだ。

中本正智先生も四人のうちの一人である。朝、昼、晩とハードな調査をされながらも早朝に目覚め、ご飯をつくって下さったのは先生である。私は大学院に入って1年目の初めての調査であったから、何事も新鮮で気合が入っていた筈だが、さすがに先生の朝から夜までの調査にはついて行けなかった。「同じ人間でありながら、どこにこれだけの体力があるのか」と驚いたものである。後で分かったことだが、先生は体力もさることながら、真に方言研究が好きであり、それを話す人々を心から愛しておられたのである。先生の調査に対するエネルギーは、そこから湧き上がって来たものであった。

先生は野菜がなくなると、近くの畑から芋の若葉を摘んで来て、美味しいお汁にした。夕方になると調査の合間を縫って、港で漁師たちの帰りを待ち、魚や貝を調達して来た。勿論その日の夕食は、先生の得意な魚のお汁とお刺身にありつくことができた。他にも区長さんとの話者の交渉や家の貸借のお願いなど、先生の恩恵を多く授かった。思うに、先生の八面六臂の活躍がなければ、大神島調査の成功はなかったであろう。

その先生と二人っきりになる時が二度程あった。一度は夕暮れ迫る頃、浜辺で泳いだことである。大神島の海はどこまでも青く澄み、夕陽がかすかに水面に揺れ映えて美しかった。その中を、自分は「奥武島の漁師の子孫だ」と言って、逞ましい胸で水面を滑るように巧みに泳いだ。久しぶりの海水浴に、終いには心地好い水の感触に誘われて海水パンツまで脱ぎ捨て、魚になって泳ぎ廻った。時折、潜っては色の綺麗な貝を見つけ出し、それを私に見せながら無邪気にはしゃいでいた少年のような先生を、今でも思い出す。

今一度は、星を観たいと小高い丘に登った時である。一日の調査を終えた充実を感じ、しかも大神島の夜は静寂で空気は冴え、外燈の光に乏しいから、星はくっきりと瞬き、大粒のダイヤモンドをちりばめたように闇に漂って見えた。先生は暫くの間星空の美しさに見惚れ、立ち竦んでいた。その姿は、荒浅な私にはない繊細で豊かな心を感じさせ、神々しくさえ思えた。クリスチャンはできるだけ神に近づいて祈る時、山や丘に上がるのだと、最近牧師の説教で聞いたことがある。あの夜、先生も自然の美に触れ、調査や諸々の恵みのため密かに

祈っておられたのであろうか。

私が先生の許で日本語学を学ぼうと決意したのは、先生の学問が「K音考」などに見られる如く、緻密で優れていたからである。その学風は、仲宗根政善先生の綿密で実証的な研究方法の上に、服部四郎先生の高度な言語学理論を据え置いたもののように思えた。しかし、大神島の調査の中から、学問のみならず、人柄でも非の打ち所が無い程立派な先生であることを知った。そして全てを備えた先生が、近い将来、日本語学の重鎮として秀でた貢献をされるであろうことを、心に描いた。

この年の3月、名著『琉球方言音韻の研究』は上梓され、12月に「第四回伊波普猷賞」を受賞された。先生は一流の言語学者として歩み始めたのであった。

(琉球大学教授)



1988年2月「国語学講義Ⅰ」の集中講義の後で学生達と（琉球大学教育学部玄関前）